

目黒稲門会会報



(題字：眞仁田 勉 初代会長)

第50号 2011年 3月

発行人：大野 利幸 編集長：服部 尚彦 事務局長：小杉 哲
事務局：〒152-0023 目黒区八雲4-9-14 Tel 090-7825-6270

2011年新年会 盛大に開催

2011年の目黒稲門会新年会が、1月16日(日)目黒雅叙園に於いて盛大に開催された。会場には来賓・会員とその家族合わせてこれまで最多の88名が集まり新年を祝った。

石川智子幹事の司会により冒頭挨拶に立たれた来賓の青木英二目黒区長から、昨秋来の大学スポーツでの早稲田フィーバーが今年も続くことを願っているとのお話を頂いた後、第1部の新春講演会に入った。

始めに浅海敏之相談役により、当日の講演をお願いした元早稲田大学ラグビー蹴球部監督・清宮克幸氏の紹介があり、登壇された清宮氏から「栄光の早稲田ラグビー・・・勝ち続けるためには」と題してご講演を頂いた。

1年の時から早大ラグビーの中心選手として活躍された同氏のお話は、直前に行われた全国大学ラグビー選手権で帝京大学に惜敗してしまったとはいえ、折しも六大学野球・箱根駅伝とあわせ、大学スポーツのビッグイベントに関心が高まっている時でもあって、参加者全員興味深く耳を傾けた。

同氏は講演の中で、「自分は勝負強いと自負しているが、ラグビーに於いても勝ちに敏感な選手が何人いるかで勝負が決まるものだと思っている。練習してきたことだけを忠実に実行するだけでなく、勝負の匂いを感じて対応することが勝ちにつながる。今年の大学ラグビーも、下馬評は早稲田有利であったが、帝京大の想定以上の戦略に機敏に対応出来なかったのが敗因。今年は、主力選手を始めとしてチーム内に勝負勘があるように感じられなかった。」

—☆—

「ラグビーの魅力は体を張ってボールを護る・味方を守るところにあると思う。そういう競技に身を置くと、私生活においてもそういう行動になるものかもしれない。」

高校生の時のニュージーランドから始まり南アフリカ・ロシア・モンゴル、その後エール大学・オックスフォード大学とラグビーをしながら法律の勉強を続け、いま東欧で国際弁護士をしているラグーマンがいる。体を張って自ら道を開いていく見本のような仲間



である。

サントリーの監督時代にチームスタッフとして力を貸してくれた村田信之氏(目黒稲門会会員)もそうした仲間の一人であり、イラクでテロの凶弾に倒れた外交官の奥克彦氏も日本のために自ら体を張って進んでゆく型の、大事な早稲田ラグビーの先輩であった。」

—☆—

「自分はラグビーを、いい涙を流すためにやっていると思っている。」

特に、決勝前日の上井草のグラウンド。そこでは日本で一番熱いラグビーの試合を見ることができる。

4年間ファーストジャージ(レギュラー)を目指して来ながら夢果たせず、翌日の決勝戦に出られない選手達の試合が1試合だけ行われるのである。この試合こそが早稲田ラグビーのプライドと魂を感じさせられる試合だと思う。自分たちは明日の決勝戦には出られないが、決勝戦に出る仲間へ4年間のすべての思いを託して戦うのである。上井草グラウンドの選手・観衆に4年間の様々な思いが去来して、最後は皆感極まってしまう。人は自分の為よりも仲間の為に、より大きな力が出せるものだと実感させられる貴重な場だと思う。」

—☆—

「自分はこれまで、早稲田・サントリーと人気も実力もあるチームでやってきたが、来シーズンは今までとは違ったカラーのチームへ行行って、弱いチームを強く育てるというような、違った角度からラグビーに取り組んでみたいと思っている。」

—☆—

同氏は最後に「今年は9月にワールドカップ、11月には早慶戦と続く。いい選手が卒業してしまったあとではあるが、残った選手がきっと頑張ってくれると思うので、ぜひ声援を送っていただきたい。目黒稲門会に、ラグビーファンが沢山きたら嬉しく思う。」と話を結ばれ、ラグビー愛一杯の熱血講演が終了した。



続いて第2部の懇親会に入り、初めに大野利幸会長から、新年の祝辞とともに「昨年は事務局も充実し、会員も着々と増えているし、各部の活動も一段と活発になっているように思う。校友会に出席すると他地区の稲門会から目黒稲門会の活発な活動について参考にしたいとよく言われる。これも歴代会長のご尽力のお陰であるといつも言っているが、嬉しいことである。

今年も大いに楽しく活動して、校友会から期待され目標とされるような、一段と飛躍した目黒稲門会を目指したい。」と挨拶があり、島田久家会計監査役の発言による乾杯で歓談に入った。

当日は加藤榮護相談役・浅海敏之相談役・後藤克彦副会長寄贈の銘酒も用意され、程良くアルコールが入るにつれ各テーブルとも大いに談笑の花が咲いた。

宴半ば、司会の石川幹事から、「目黒稲門会会員で米寿をお迎えになられた先輩が4名おいでになり、本日は阿部喜久雄相談役と樋口定廣相談役が出席しておられるので、ささやかながらお祝いをしたい」と話しが出され、万場の拍手に促されて壇上に進まれた両相談役に対し中上美代子幹事・中西千可子幹事から花束が贈呈された。両相談役のユーモアあふれる答礼もあって、会場はさらに一段と盛り上がった。



歓談の進む中、新年会初参加の山木宏之氏、村田信之氏、河村晋彦氏の紹介並びに挨拶があった。

予定の時間が迫ったところで、恒例となった松田哲也会員の元気一杯のリードで校歌を斉唱、服部尚彦副会長の中締め挨拶と続き、盛会のうちにお開きとなった。

今年一番の寒さとなった真冬の日であったが、ひと時それを忘れさせる賑やかな新年会であった。

(地田 記)



新年会初参加会員（左から河村、山木、村田の諸氏）

新年会出席者（敬称略、五十音順）

（来賓）

青木英二・目黒区長、清宮克幸・講師、

（会員）

浅海敏之、阿部喜久雄、荒瀬修一郎、安藤 孝、安藤虎雄、安藤嘉昭、石川智子、石川純子（母上）、市瀬一江、市瀬達夫、伊藤源喜、伊藤 悠、稲垣博信、井村正陽、岩佐幸子、岩佐好恭、岩崎春雄、岩崎正夫、鶴野洋治、海口昭治、大久保健治、大杉邦雄、大野利幸、大野幸子（夫人）、大山高明、小倉利充、海沼美智子、影山信輝、笠谷興一郎、梶 恵作、柏木 博、加藤榮護、加藤玲子（夫人）、川井信義、川崎真樹子、河村晋彦、小池早苗、郡山弘文、郡山富子（夫人）、小杉 哲、後藤克彦、小林 彰、桜井輝隆、佐々木芳子、佐藤喜孝、嶋田勝彦、島田久家、下村尚久、庄野 耕、高橋圭吾、田島順一郎、田畑 繁、地田博昌、千野逸平、手塚仁雄、外岡 明、外岡ルリ子（夫人）、永井正孝、中上美代子、長島清志、中西千可子、中西元樹、服部尚彦、林田雅敏、林田敏子（夫人）、樋口定廣、樋口俊彦、星野聡史、堀井良造、牧野武夫、松尾洋一、松田哲也、眞仁田勉、村上 柁、村上 満、村田信之、森家一三、保井 正、山木宏之、山木伽予子（夫人）横山 大、吉田成孝、吉田博行、吉本政治、渡邊三郎、大橋ヒデ子（友人）

☆☆☆☆☆



旅行部会「佐渡の旅」

各部会からの案内・報告

カラオケ部会

部会の参加者も日によって多少の変動はありますが、概ね落ち着いて参りました。和気藹藹の内に又一年を過ぎようとしております。

テレビ放送の「脳科学で解った脳の疑問を解決」

1・遊びで脳を鍛える 2・物忘れを予防する

効果的なものに(歌詞・曲を覚える)カラオケがあると【放送の抜粋】・・・

平成13年5月第10回より私海口昭治が3代目世話役を引き継いで参りました。参加者の拡充に樋口・阿部両先輩のお骨折り、ご指導の下、盛会を見ることが出来ました。有難うございます。

今回まで参加された40名に毎月ご案内をFAXにてお誘い致しております。

唄の順番待ちの接待に、大野会長夫人に大変なお手伝を頂き、また、石川幹事母上には受付を御手伝い頂き誠に有難うございます。

眼の悪化のため本年3月を以って退任致します。微力な私に今までご協力を戴き感謝申し上げます。新年度4月より次期部会長就任に快諾戴きました田畑 繁氏を宜しくお願い致します。

カラオケ部会長 海口昭治



ゴルフ部会

ゴルフ部会大会を下記要領にて開催いたします。

記

1. 日時：2011年4月22日(金曜日)
2. 場所：富士ヘルス&カントリークラブ
静岡県駿東郡小山町上野 1492
TEL:0550-76-0550
3. 会費：ゴルフプレー代(キャディ、カート代含む) 13,700円(昼食代は別)、
パーティ代 3,000円、参加費(バス代等) 5,000円、計 21,700円
4. 送迎：ゴルフ場へ送迎バス運行
参加申し込み締め切りは3月25日(金曜日)
大杉まで、電話：03-3794-6092 または
メール osugik@a01.itscom.net
でお知らせください。

ゴルフ部会長 大杉邦雄

ウォーキング部会

11月部会(第41回)「鎖大師から人気の鎌倉山」
穏やかな日差しに恵まれて静かな町並みを満喫
最後は江ノ島の腰越漁港で反省会。

12月部会(第42回)「野川沿いのはげの道と武蔵野の自然」
晴天に恵まれ野川沿いの国分寺崖線を散策し、最後は調布で解散。

今後の予定

3月部会 二ヶ領用水沿いの桜並木
日時 3月29日(火) 午後1時集合
場所 南武線久地駅改札

4月部会 川越の寺町と氷川神社
日時 4月19日(火) 午後1時集合
場所 西武新宿線本川越駅改札

5月部会 荒崎シーサイド散策
日時 5月11日(水) 午後1時集合
場所 京急三崎口駅改札

特別企画 鬼平犯科帳を歩く
日時 5月18日(水) 午後1時30分集合
場所 都営地下鉄新宿線森下駅改札
参加予定の方は牧野まで連絡ください

☆ 部会特別企画「鬼平犯科帳を歩く」

鬼平犯科帳(文春文庫)7巻「寒月六間堀」に登場する場所をメインに本所・深川を歩きます。案内人はホームページ「鬼平犯科帳と江戸名所図会」を主宰している猪名川一雄氏(昭和45年 政経)です。

5月18日(水) 午後1時30分 都営地下鉄新宿線・森下駅改札外集合、五間堀・六間堀跡、弥勒寺、二ツ目橋(「五鉄」跡)、五郎蔵・おまさの住居跡、吉良邸、一ツ目橋、江島杉山神社、新大橋、隅田川テラス、芭蕉稲荷、猿子橋跡、小名木川遊歩道、高橋、靈巖寺を経て「江戸深川資料館」で再現された江戸の街並みを体感します。

そのあと清澄白河駅から地下鉄で門前仲町駅へ移動し、富岡八幡宮、永代寺を訪れ、午後4時頃から割烹「かね松」で懇親会をおこないます。懇親会への参加・不参加は自由です。

お申し込みはウォーキング部会長 牧野武夫まで。
携帯 090-9649-6868 メール tamakino@aol.com
ウォーキング部会長 牧野武夫



囲碁部会

(1) 第49回オール早慶囲碁フェスタが平成22年12月5日(土)、日本棋院市ヶ谷本院において囲碁会現役、囲碁会OB、首都圏各地域稲門会から116名の参加により盛大に開催された。

無差別戦	早稲田 68勝	慶応 80勝
ハンデ戦	早稲田 28勝	慶応 21勝
現役戦	早稲田 27勝	慶応 8勝
合計	早稲田 123勝	慶応 109勝

第49回は早稲田大学が勝利した。

目黒からは大久保健治七段、保井正三段が参加した。

(2) 目黒忘年囲碁大会

平成22年12月13日(月)に下目黒住区センターにおいて、20名の参加者で開催された。

各クラスの優勝者

- A 古川欣一氏(昭和35年 政経) 初優勝
- B 郡山弘文氏(昭和27年 商) 初優勝
- C 永田耕治氏(昭和36年 商) 3連覇
- D 鶴野洋治氏(昭和39年 商) 初優勝
- E 梶 恵作氏(昭和37年 政経) 初優勝

(3) 平成23年1月の定例囲碁部会に小谷友宏氏

(昭和44年 政経)が初参加された。同氏は平成21年に早稲田大学校友会事業委員会が主管した「全く囲碁を知らない校友」を対象とした第1回夏季囲碁入門講座の卒業生である。

囲碁部会長 保井 正

麻雀部会

(1) 3区連合親善麻雀大会

11月27日(土)渋谷の麻雀クラブ スリーハンドレッド に於いて第28回(目黒、世田谷、大田)連合麻雀大会が目黒稲門会主催で開催されました。20名参加による親睦を深めた競技の結果、優勝は草野氏(世田谷)準優勝は松尾氏(目黒)、3位は脇坂氏(世田谷)となりました。

(2) 定例麻雀大会

12月12日(日)、武蔵小山 麻雀クラブ・サンに於いて本年最後の第42回麻雀大会が15人参加により開催されました。和気藹々の競技の結果、優勝は大久保氏、準優勝は郡山氏、3位は小倉氏でした。大会終了後、中華料理店 井門にて忘年会を実施し部会員相互の親睦を一層深めました。

(3) 今後の大会予定

4月 9日(土) 第29回3区連合親善麻雀大会
6月 19日(日) 第44回定例麻雀大会
8月 27日(土) 第30回3区連合親善麻雀大会
10月 22日(土) 第31回3区連合親善麻雀大会
12月 11日(日) 第45回定例麻雀大会(忘年会)
を開催予定しております。皆様奮ってご参加下さい。

麻雀部会長 鶴野洋治

美術・歴史鑑賞部会

昨年は「マネとモダン・パリ」、「オルセー美術2010」、「ドガ展」等の印象派を中心とした絵画展を楽しみました。今年の部会は、より幅広く絵画、彫刻、仏像、陶芸、書等と楽しんで行きたいと考えています。

この春の注目は、ボストン美術館所蔵の浮世絵名品展です。出品作品は、鳥居清長、喜多川歌麿、東洲斎写楽、勝川春章、鳥文斎栄之、歌川豊国等。ボストン美術館の日本美術コレクションは、明治初期、日本美術に魅了されたエドワード・モーリス、アーネスト・フェノロサ、ウィリアム・ビゲロー等の有識者によって収集されたもので、その充実した内容で知られています。特に日本美術コレクションの中でも最大数を占める約5万点の浮世絵版画、約700点の肉筆浮世絵は、日本国外では質・量ともに世界屈指。ボストン美術館では、あまり公開されることなく、長年一般公開が待たれていました。

今回、錦絵の黄金時代の代表と言われる天明・寛政期に焦点をあて、清長・歌麿・写楽の絵師を中心とした選りすぐりの作品が出品。広尾にある山種美術館で2月26日から4月17日まで。美歴では、3月16日(水)に鑑賞予定です。本展覧会終了後、ボストン美術館でも5年間は展示されることはないといわれている浮世絵を楽しみましょう。

第30回 美術・歴史鑑賞部会のご案内

- ・「ボストン美術館・浮世絵名品展」
- ・場所：山種美術館(渋谷区広尾3-12-36)
JR恵比寿駅、地下鉄日比谷線恵比寿駅徒歩10分
*広尾高校近く
- ・日時：3月16日(水)10時集合(山種美術館入り口)

- ・申込みメ切：3月9日(水)
- ・入場料 既に招待券入手
- ・昼食：各自負担(恵比寿駅近く予定)

参加申し込みは 後藤克彦(03-5704-9181)

メールは g-katsu@gj8.so-net.ne.jp

美術・歴史鑑賞部会長 後藤克彦

俳句部会

(前号より続く)

室町時代中期になりますと連歌の最盛期を迎え、室町後期には、芭蕉が崇拜した先人の一人である「飯尾宗祇」が中心となり連歌の集大成である「新選寛政波集」が編纂されました。また1499年には宗祇の発句集「字良選」が編集され、ここに発句の独立が確認されたのであります。この発句の独立こそが、現在の「俳句」の基盤となったのです。ところで連歌はおびただしい規則にしばられ、かつ形式化したため陰りが見え始め、そのころ台頭してきた商人が中心となり庶民感

覚をもとに新風(卑近滑稽)を吹き込んだ「俳諧の連歌」が山崎宗鑑や荒木田守武らにより全国に広まりました。後には略して「俳諧」とのみ言うようになったのです。(以下次号)

第25回(2011年1月度)「萩句会作品」

安藤虎雄 遠富士をまづ染め上げし初日の出
川井素山 松過ぎて漁夫の賑はい船溜まり
紀本直幸 御降^{おさかり}や庭の草木も薄化粧
保井寶正 句の会を先づ書き込みし初曆
米田文彦 お降の清めし空に凜と富士
佐々木彩女 島影の肩脱ぎてゆく初あかり
青木英男 寄席通ひ名人芸に初笑
佐久間喬 青空に富士山白し寒の入
牧野武夫 御降や鎮守の森の鐘の音
佐藤喜仙 店先の葱の白さや詩人逝く

俳句部会長 佐藤喜孝

会員の広場

『富山と俳句』

米田文彦(昭41年 政経)

俳句部会に入れて頂いて2年半、会の皆様に助けられて何とか楽しく続けさせて頂いています。俳句のことを曲がりなりにも毎月考えるようになると、関係の本、雑誌にも気持ちが向くようになり、いろいろな句に出会うようにもなりました。

今回このような機会を頂戴しましたので、私の故郷富山ゆかりの俳人の句をご紹介します。

富山の冬は雪、山は立山であり、俳人としてまづ浮かぶのは前田普羅であります。普羅は会社勤めの身として、転勤で富山の高岡に住まいし、山岳を詠んだ句にファンの多い大正の人です。

立山のかぶさる町や水を打つ (前田普羅)
うしろより初雪降り夜の町 (同上)
雪卸し能登見ゆるまで上りけり (同上)

以下、富山の方々の句を私の独断と偏見で紹介させていただきます。

雪解の北に流るる大河かな (山口花堂)
大河とは、神通川か黒部川でしょうか。
売店の小さき春の炬燵かな (上野たかし)
章臥れて花見衣装の仮だたみ (神沢秋曼)
新盆の語る人なき広間かな (小中勿思)
バラバラに居りて残暑の法話聞く (谷内いさむ)
昼寝して次の法話を待つ人等 (室生砺川)
浄土真宗の強い地方です。
袖ふれておわらおどりの涼しき瞳 (岩崎夜鶴)
鱒の海荒れて櫓櫂は弓なりに (東軒生露)
新嫁の里の新米届きけり (上川原杜城)
山坊の妻となり住み零余子飯 (本多十楼)

・山坊：山中の僧坊、即、お寺。
・零余子飯(ぬかごめし)：芋の葉の付け根辺りに出来た芽の混ぜ飯。米の節約でもある。

実家の親が嫁にやった娘を心配して、嫁ぎ先に新米や鱒を届けたその娘も、山坊の妻となって数十年。寂しさなどだけでなく、しみじみとした充足を感じさせるものもある句のように思います。

女性はしっかり者が多いのです。

皆様のお国にも立派な方は多いことと存じます。今回は俳句という面から富山の一端を紹介させていただきました。以上

『佐渡旅行記』

吉田成孝(昭和37年 政経)

平成22年11月7日朝6時50分、目黒駅に集合した我々目黒稲門会メンバー20名は、井村部会長、大野会長夫妻をヘッドに勇躍、初の海を渡る旅に出発した。

MAXときで新潟に着き、ジェットフォイルで佐渡両津港へ渡った。この船は海上を時速70kmで飛ぶように走るという優れたものだが、窓が高いのと座席から離れられないため、景色が見られず高速感を十分味わえなかったのは残念だった。

港の海鮮横丁で昼食を取ってからバスでトキの森公園へ行き、日本で数少ないトキを観察した後、大佐渡スカイラインを通過して島の西側に行く。

新潟地方はこのところスッキリしない天気だったが、この日は我々のためによく晴れてスカイラインの紅葉は素晴らしかった。

最高点は800m、そこから下った後に訪れた佐渡金山では、昔採掘夫が作った迷路のように入り組んだ坑道あとを踏みしめながら歩き、往時を偲んだ。

島の反対側、相川に近いホテル大佐渡に着いたが、ここで素晴らしい瞬間に出会う。我々の眼前で真っ赤な太陽が海に沈んでゆく。すっかり沈んだ後もまだ空に残っている真紅の色が目の底に残っていつまでも忘れられないものとなった。

翌日はまたバスでまず尖閣湾。水族館で日本でも珍しいイカの遊泳を眺め、島に架けられた橋から雄大な海岸線を眺めた後、西川ゴールドパークに行った。

ここで体験した砂金採りでは、初めいくら掬っても金は出て来ず嫌気が差し掛かったが、やり方を教わって、自分の掬った網に金色が2粒光った時は、一瞬大金持ちになった気分だった。

この後、一路両津港へ向かったが、この日は雨が降ったり止んだり、明日は大時化との予報。帰りは一般のフェリーで、来た時より2.5倍の時間がかかったが弁当を食べたり、船内を歩き回ったり、床に横になったりしている内に新潟に着いた。

新幹線で19時東京着後解散、変化のある楽しい初体験の旅でした。感謝。

特別記事

『会報 50号発行までの編集史』

今号で目黒稲門会会報は第50号の発行を迎えた。目黒稲門会の草創期から会報のインキュベーションを経て成長期への歴史を綴るため、これまで編集に携わって来られた代表の方に、その歩み、苦勞を寄稿して頂いた。(広報編集委員会)

— 想い出は遠く成りにけり —

樋口定廣 (昭和17年 専法)

平成10年6月、学窓を出て57星霜、大学校友会より封書来簡、市区単位に稲門会の設立を要請され、9月校友会館に参集し、10月設立準備委員会を開催し平成11年1月27日まで委員会・世話人会を繰り返し、13回を以って会則案・役員候補等決定、1月30日恵比寿ウェスティンホテル東京にて目黒稲門会設立、以来一昔を越え、12年の歳月に達したとは……。

想い出は、会員募集の手紙を出しても東京に大学が在るのに何で会を作らなければ成らないか等など電話・返信が来た想い出、会運営等の参考の為港稲門会の設立総会・目黒慶応義塾会懇親会の見学に行った事など今更ながら想い出した。

目黒稲門会が現在「活発である」と校友会から評判をいただいている大きな要素、それは各部会の活動にあると思う。設立時から囲碁部会、麻雀部会、ゴルフ部会、カラオケ部会、ダンス部会などが次々と立ち上がり、各部長が活発に(ときには強引に?) 勧誘活動を展開された。この部会活動の内容・スケジュール・活動報告を側面で支えるため、どうしても会報発行が必要になった。そこで事務局としてパソコンDTP(デスクトップ・パブリッシング)に詳しい岩崎氏に編集作業を担当してもらった。

パソコンが出来ず週に1回会報原稿を持って岩崎正夫氏宅に通った。また、週に1回は訪問しあって編集打合せ、原稿受け渡し。各部会の日程がたまと「そろそろ次号を出しましょうか」などアウンの呼吸で打合せていた。現在のきちんとした会報編集会議から見れば、実に気楽なものであった。そして編集作業・発送作業。役員会で発送作業のボランティアを募り、下目黒住区センターで封入作業。封入が終わると大鳥神社からバスで目黒郵便局に持ち込んでいた。局内で「区内特別郵便」の判を自分達で押し窓口に提出。郵便局員に郵送代を計算してもらい現金で支払ったのも懐かしく想い出される。

現在の事業運営は会員諸氏役員の皆様方のご協力により円滑であり、部会活動など他地区稲門会の追従を許さない目黒稲門会と確信している。役員各位・会員諸氏のご指導のもと今後共、和光同塵の心をもった会員として参加してゆきたい。

— 会報創刊編集担当 —

岩崎正夫 (昭和47年 商)

平成10年10月、目黒区と港区の校友有志が校友会館に呼ばれた。参加者は30数名。はじめに学校側から会合の趣旨が語られた。「大学は、23区全区に稲門会を作りたい。他の21区はすでに創設済または創設準備中である。ここで本学一層の発展のため、あなた方の区にも地域稲門会を作ってほしい。」そのあと、目黒区有志で自己紹介と創設の会議。そのあと数回会合を重ね、月1回の幹事会開催、会則の制定、眞仁田氏(元副知事・当時東京都競馬社長)へ会長就任のお願いなど、設立準備がすすんでいった。しかし、同窓とはいえお互い初対面からまだ日も浅い。そこで樋口事務局長の提案で有志による「箱根1泊旅行」を決行。浅海氏、土川氏、樋口氏を中心に打ち解け、お互い冗談を言い合える仲にもなってきた。その帰りの新幹線車中、浅海氏が「部会や行事のお知らせをする会報的なものがあるといいなあ」と呟かれた。ラグビー部OB会を束ねてこられた経験からの言葉であろう。

そこで私が「じゃあ、私がプリンタで作ってみましょうか……」これが目黒稲門会会報の生まれるきっかけになった。

当初は年1回、会報を作成・送付していた。しかし、どんどん部会が多くなり、その活動も活発になるにつれ、情報が遅れてしまう不便さが指摘されるようになった。そこで情報遅れを改善し、タイムリーな話題を提供しようと「目黒稲門会 EXPRESS」という簡易プリント会報を年3回出すようになった。この時期は年2回の会報(印刷版・総会と新年会の情報中心)とその間を埋める「目黒稲門会 EXPRESS」(プリント版・部会情報中心)が3ヶ月ごとに発行された。予算も多少増え、8ページなどとページ数を増やした号もあった。これで年4回体制(ほぼ3ヶ月ごと)ができた。

その頃はまだ編集委員会がなかったため、毎回、樋口事務局長と掲載記事を検討し発行していた。

平成14年4月に実務のまとめ役であった樋口事務局長が退任され、役員体制も大きく変わった。また会員数もさらに多くなり、今までのようなばらばらな個人プレーでは処理しきれない規模になった。そこで会報編集委員会が正式発足。編集委員会では毎回、委員諸氏からアイデアあふれる提案があり、記事内容がぐんと豊富になった。偏りのない情報、大学サイドの情報がふんだんに集まるようになった。この時期、目黒稲門会が東京23区を束ねる幹事区だったこともあり、とくに23区代表として学校からの校友会情報が充実した。また校友会と連携し、区内の校友に対し入会をお誘いする「勧誘キャンペーン」も始まった。というわけで、編集委員会はテーマが大きくひろがり、志ある委員の方々から次々と本質を見据えた意見が提示された。設立3～4年の揺籃期間を経て、会組織の動き

が本格的になったと実感した。パソコンの普及により、依頼原稿・写真も、ワープロやデジカメデータでくれる方が多くなり、(=手入力作業が少なくなり)、レイアウト作業も格段と楽になった。わが編集チームに感謝!

—初代編集長—

藤岡長世(昭和22年 法)

稲門会発足5年目に入り新たな1歩が始まりました。目黒稲門会会報第7号に掲載されているように、それまで会のまとめ役であった樋口事務局長が退任され、組織も大きく変わった。会員数も増え従来のやり方では処理しきれない規模になって、幹事も増員して会報担当の編集委員会が発足し、私が幹事会の指名で編集長を担当することになった。

幸い事務局長の岩崎氏が拙宅に見えられ、会報の編集について打ち合わせを行い、種々アドバイスをいただいた。会報の定期発行に伴い、編集委員会も定期的に開催し、委員会も場所を下目黒の住区センターの1室を借りて開催することとした。

お引き受けした以上は、確たる方針の下に実践すべきであると考え、現役時代に勤務していた会社の社内報を手本に広がった部会の活動状況をできるだけ詳細に発表することによって、例えば、ゴルフ部会の成績・写真などを掲載することによって、参加者が増えることになれば部会の活動に協力できると考えた。

次に、もう一つ大事なことは早稲田大学とのつながりではないだろうか、自分をテーマとして、在学中の思い出として発表していただくのは如何かと考え、早稲田と自分をテーマにした文章を「リレー随筆」として友人にバトンタッチで行くことに意義を感じるのである。私はその第1号として、昭和17年早稲田高等学院に入学した当時の級友の姿や雰囲気を「早稲田と私」として書き上げ掲載した。知らない人たちがそんなことがあったのかと親しみを感じて貰えるのではないだろうか。

こうして区内の校友に対して入会をお誘いする機会も広まった。時には、委員の方から積極的な意見が出され、お陰で会の組織の動作が本格的になったと実感した。

—会報50号発行に当たって(前編集長)—

外岡 明(昭和26年 理工)

目黒稲門会は、平成11年(’99)1月30日に設立され、同年4月に「目黒稲門会会報創刊号」が発行された。爾来、編集関係者のご努力とその継承により、今日に至っている。

私が担当したのは、第28号(05年9月)から第35号

(07年6月)迄であったが、この「第28号」については、若干触れて措かねばならぬ事がある。

当初から「会報」は、年1回発行とし、別に会員への情報伝達の速報性を補完するものとして「EXPRESS」という小冊子が、年3回程度発行されていた。しかし次第に「EXPRESS」の内容も充実して来ていたので、会報と2本立てにする必要はなくなったと判断し、「EXPRESS」を止めて「会報」を年4回発行することとした。しかし、それまでに会報は第8号まで、そしてEXPRESSは第19号まで発行されていた。従って、次号会報の連番号数を何号にするかで若干迷った。EXPRESSは含めず「会報第9号」とすることも考えたが、EXPRESSが19回発行された実績は捨てがたく、また創刊号から苦勞された編集委員の方々のご努力と当会の草創期の歴史でもあるので、「EXPRESS」の発行号数をも加算して「目黒稲門会会報第28号」とした次第である。

[着眼大局 着手小局]。これは私の現役当時のモットーであったが、会報編集に当たっても、思考の基盤はこれであった。

新編集委員(9名)による委員会で「会報の目的」を再認識し、その目的達成のための手法などを合議して、新構想による会報がスタートした。

しかし、実際には夫々御用をお持ちの方々なので、全員が一同に会するのは困難であった。

そこで島田久家(昭27年 商)、保井正(昭34年 政経)、服部尚彦(昭35年 理工)の3氏には常任者として常に参画願ひ、格別のご協力を頂いた。そして次の様なグランドデザインを描いて始動した。

- ① 年4回発行の「主題」は、6月号 総会案内、9月号 総会報告、12月号 新年会案内、3月号 新年会報告とし、大きさはA4版とする。
- ② 内容は、「校友会」「会員消息」「各部会報告」などで 会員に情報を提供し、「リレー随筆」「特別寄稿」「会員の広場」などで会員の様々のご経験やご意見の発表を頂く。
- ③ 表題部分のデザインを一新し、表題「目黒稲門会会報」の文字は、眞仁田初代会長に揮毫をお願いする。
- ④ 文字配列は、従来通り英・数字が書き易い様に横書きとし、また読み易い様に1頁を2列にして、左綴じとする。
こうして発行した初号(28号)は、ペラ1枚差し込みの6頁で、文字は黒、写真はカラーとした。この結果は役員会で一応了承はされたが、なお若干のご意見、ご要望もあり「第29号」からは、更に一部修正を加えた。
- ⑤ 印刷は、「墨1色刷り」でなく、「えび茶色の1色刷り」とした。が、「えび茶」の色の正確を期すた

め、大學に「カラー番号」を問合わせたが判然とせず、止む無く数種の早稲田の印刷物を参考にして目視で最適と思われる「DIC-299番」を採用した。そしてページ数は、A4判の8頁とし、年1回は、4色カラー印刷にすることとした。

- ⑥ 文字は、読み易いことを考慮し、1行の文字数：23字、行数：49行、フォント：MS明朝体、大きさ：10ポイントとした。
- ⑦ 用紙は、A判コート紙で、ページがめくり易く、軽く丸めて持ち歩ける厚さということで前号より若干薄くし、厚さ：70.5 (kg/1000枚) とした。

このような試行錯誤を重ねて現行の基本形が出来たが、その後も、毎月1～3回の打合せ会を持ち、甲論乙駁を重ねて内容の充実を図って来た。

そして「第36号」(07年9月) から、現在の服部編集長の時代に入り、号を重ねて今回「第50号」と一つの区切りの時期を迎えることになった。

昨年10月、服部編集長の発議で、発足時からの編集関係者が集い、会報の新たな姿を模索する会合が持たれた。そこでは現編集委員の方々から新しい考え方なども開示され大変有意義な会であった。

時代の変遷というか、私の編集手法は、前述の様に、何度も会合し顔を合わせて作業してゆく「アナログ的編集作業」であったが、現在はIT時代らしく編集委員の間だけでなく印刷屋さんまで含めて電子化した「デジタル編集」で効率的・合理的に運営されており、流石！と感じている。

会報の外観は、ほぼ現行で維持出来るが、「内容の充実」という事は、終点の見えないテーマである。

毎号編集委員の方々を知恵を絞って努力されておられるが、やはり会員の皆様方の暖かいご支援が不可欠と思われる。目黒稲門会は多士済済の集う会と云われている。是非会員皆様方の、豊かな人生経験の「語り場」として「会報」を盛り上げて頂ければ幸いに存じる次第である。以上

事務局便り

新年会に関しては巻頭記事の通りですが、今回は過去最高の参加者(88名)で盛り上がりました。

目黒稲門会には長寿でお元気の会員が多数おいでになります。米寿(88歳)を迎えた方は4名いらっしゃいますが、今回出席された2名の方に花束の贈呈が行なわれました。

今回は昨年組織された新しい事務局体制で、副事務局長3名の総合力で新年会を執り行ないました。不慣れでもあり行き届かない点も多々あったかと存じますが、ご容赦願います。

事務局長 小杉 哲

新入会員



須田幸子氏(昭和33年 文)(下目黒在住)
趣味：詩吟・登山
後期高齢期にはいりました。早稲田125周年の折目黒稲門会旗を大隈講堂の前で見たことがありました。目黒生まれの目黒育ち、仕事も東京都の教育委員会でした。最後の住居です。みなさんよろしく。



丸山忠生氏(昭和44年 法)(八雲在住)
趣味：油絵、エッセイ
広告代理店マッキンゼーエリクソンに入社後、自営独立、レストラン経営、貿易会社経営、そしてバブル崩壊、紆余曲折の中で、絵画、執筆などにも目覚めたのであります。皆々様とともに楽しんでいきたいと存じます。くれぐれも宜しくお願い申し上げます。



青柳 勝氏(昭和45年 法)(上目黒在住)
趣味：ゴルフ、カラオケ、麻雀
今年3月末6年の大阪単身生活を終え、東京の自宅に帰ってきました。大阪では、大阪早稲田クラブに入会、ゴルフ部の行事に参加していました。今後は地域の稲門会に入会し、仲間を作りたいと思っています。



村田信之氏(平成5年 政経)(大橋在住)
趣味：ラグビー、ジョギング
目黒に住んで17年になります。早稲田大学には学部で6年、大学院で1年、教員として8年お世話になっています。そろそろ目黒と大学を結ぶ稲門会で恩返しをしたく、入会を希望いたしました。よろしく申し上げます。

HP便り

会報には紙面の制約等もありますが、HPには十分余裕がありますので写真もふんだんに載せられます。部会以外でも掲載したい写真等がありましたら是非メールで数行のコメントと共に事務局までお送り願います。(小杉 記)

編集後記

会報も回を重ね第50号を迎えた。この間、会報編集に携わって来られた方々にお集り頂いて「新会期の会報を考える」として、多面的に闊達なご意見を拝聴する機会を得た。この結果は役員会でご報告をしたが、会報の草創期から現在までの編集の歩み、ご苦勞を編集史として記録しておく必要性を強く実感した。

そこで、今までの代表の方々に編集の立場から会報を振り返って頂く寄稿をお願いして特別記事『編集史』が実現した。まさに温故知新である。

(服部 記)